BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

開く？ 閉ざす？
——ふたつのヴァラームにみる宗教文化財とツーリズム

高橋沙奈美
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター助教

古き伝統を守ろうとする旧修道院と、積極的に文化センターとなった新修道院。対照的な両者の姿は、文化遺産の「遺産」概念の多様性を物語っている。

世界遺産に登録されない至宝の景観

ロシア連邦北西部、フィンランドとの国境近くに位置するラドガ湖。そこに浮かぶヴァラーム島は「北のアトス」ともよばれ、ロシアの聖地と讃えられる。ここの男子修道院は毎シーズン一〇万人以上の「巡礼」という名の観光客で賑わう。そういわれてもピンと来ないかもしれないが、与那国島と同規模の二八平方キロメートルの小島に、たった三カ月の夏の観光シーズンでこれだけの人びとが訪れるといえば、その賑わいぶりが多少は伝わるだろうか。

顕栄大聖堂前でガイドの説明を受ける巡礼・観光客

修道院の創設は少なくとも一四世紀まで遡ることができる。当時、フィンランドまで版図を広げていたプロテスタントの大国スウェーデンと境を接していた修道院は、自然「正教の砦」の役割を担うことになった。つまりそれは、度重なる戦火による破壊を意味した。この運命のために、ヴァラーム修道院の建造物は史的価値をもつ文化財としては認められていない。修道院が最盛期を迎えたのは一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてで、現存する聖堂や僧坊、宿泊施設、苦行僧のための隠遁所が整備されたのもこの時代である。

ヴァラーム島の最大の魅力は、修道院と一体化した静謐な自然景観だといえよう。修道院の景観は、当時の知識人や芸術家に多大なインスピレーションを与えた。一八七二年にラドガ湖を旅した作家のN・レスコーフは、この体験をもとに『魅せられた旅人』を著したし、作曲家P・チャイコフスキーは交響曲第一番の構想をこの島から得た。また、I・シーシキン、A・クインジなど一九世紀ロシアを代表する風景画家たちが島を訪れ、北ロシアの自然と教会建築を題材とした多くの風景画を残した。

ヴァラーム島の船着き場のおみやげの露店

革命、戦争、ふたつの修道院の「遺産」

一九一七年のロシア革命後、ヴァラーム修道院は新興の独立国家フィンランドに属することになった。フィンランド正教会は自治教会として独立。ルター派が多数派を占める国において、正教会は圧倒的少数派となったものの、一九二〇―三〇年代にソ連全土を襲った無神論政策を逃れて宗教活動を続けることができた。一九三九年一一月、ソ・フィン戦争によってフィンランド東部に赤軍が進軍すると、修道士たちは西へ向けて疎開し、一九四〇年、ヘイナヴェシに新ヴァラモ（ヴァラーム）修道院を創設した。

新修道院の博物館展示。正教文化や修道院の歴史を紹介する

ソ連領内に残された「古い」ヴァラームは「酔っ払った付添婦と、誰も涙を流すことのない静かな死」ばかりが訪れる、ひなびた廃兵院・養老院に姿を変えた。養老院は一九八二年に閉鎖され、ペレストロイカで宗教政策が緩和した一九八九年、修道院が再開した。ソ連崩壊後の修道院は伝統的な聖歌に加えてその厳格さで知られ、二〇〇一年以降、一般住民を島から移住させる計画を進めている。修道院の訪問者の九割は観光客だとみなされているが、伝統的な修道生活を重視する修道院は、経済的利益は享受しつつもこれを歓迎しない。修道院の指導者たちは、修道士は聖山アトスのように世俗との交わりを極力控えるべきだと考えている。

新修道院の船でクルーズを楽しむ巡礼・観光客

一方で、新修道院はフィンランド正教唯一の男子修道院であり、同時に文化センターとして年間一六万人以上の観光客・巡礼を惹きつけている。二〇一二年、修道院は最優良の国内観光地に選ばれた。新ヴァラモには、快適な宿泊施設と食堂、そして正教的生活や文化を伝えるいくつもの文化施設がある。旧修道院と同様、その魅力が無数の湖に囲まれた豊かな自然景観やワイナリーにあることを理解した修道士たちは、多様な観光客に広く門戸を開き、観光業を修道院の維持のために利用することを選んだ。

「新しい」ヴァラームが文化センターとして多くの人に開かれた場所であるのに対し、「古い」ヴァラームは修道院本来の伝統を守るべく、その文化的景観を一目見たいと望む観光客を排除しようとする。ふたつのヴァラームは宗教とツーリズムが混ざり合う現代社会における宗教的文化遺産の在り方を端的に示している。